

[成果情報名] 三重県に自生するシマサルナシから選抜した優良系統「みえ紀南蔓1号」
[要約] 三重県の東紀州地域に自生しているマタタビ属のシマサルナシ (*Actinidia rufa*) から、地域の特産物候補として果肉が濃い緑色で食味の良い生食用に適した系統を選抜した。選抜系統は、他の自生系統に比べ糖度が高く果実も大玉である。
[キーワード] シマサルナシ、キウイフルーツ、新品種
[担当] 三重県農業研究所 紀南果樹研究室
[区分] 関東東海北陸農業・果樹
[分類] 普及

[背景・ねらい]

シマサルナシは熊野灘沿岸部に古くから自生しており、全国的に見て北限に位置する。しかし、自生系統の多くは小粒であったためか、地域で経済栽培をされるには至っていない。また、東紀州地域の中山間地域はサル等の獣害が深刻であり、獣害に強い作物の探索が求められていた。そこで、地帯別の自生系統を採取し、特性や栽培性を評価し、経済栽培に向く有望な系統を選抜する。なお、シマサルナシは国内では経済栽培は未だ行われておらず、優良系統が選抜できれば新たな地域特産物として地域の活性化に貢献できる。

[成果の内容・特徴]

1. 「みえ紀南蔓1号」は、平成15年より県内の自生地から採取した自生系統の果実特性を調査し、優良系統を選抜した品種である。果実は縦径約40mm、横径約33mmで果実表面の毛がほとんどなく、果肉は緑色が濃い。全国の一般的なシマサルナシ（「淡路」、「府中」）の品種と比較しても大玉で糖度も高い（写真1、表1）。
2. 県内の自生系統の中でも果実重が30g程度で、追熟後の糖度は15%と、大玉で糖度が高い（図1、写真2）。
3. 雌雄異株であるため雄株の混植が必要であるが自然受粉で十分受粉が可能であり、人工受粉は必要ない。収量は、棚栽培で約1.6t/10a見込める（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 三重県南部が北限のため温暖な地域での栽培が適している。
2. 11月下旬より供給が可能であり、年末商材として活用できる。
3. 苗は、緑枝の挿し木による繁殖が可能で、蔓性のため栽培には棚などの施設が必要。
4. 収穫は、11月中下旬ごろに糖度が8%以上に達してから行い、可食のためには追熟が必要である。追熟は13~15℃でエチレン処理をすれば10~14日で可食適期となる。
5. 県のレッドデータブックにも絶滅危惧IB類として記載されており保全が求められる。
6. 栽培には三重県の許諾が必要（平成28年11月15日品種登録出願：第31581号）。
7. 病害虫はカイガラムシ等が発生するが、シマサルナシの登録農薬は無いため、果樹登録の農薬を使用する。落葉後の機械油乳剤や生育期間中殺虫剤のBT剤を数回利用するとよい。

[具体的データ]

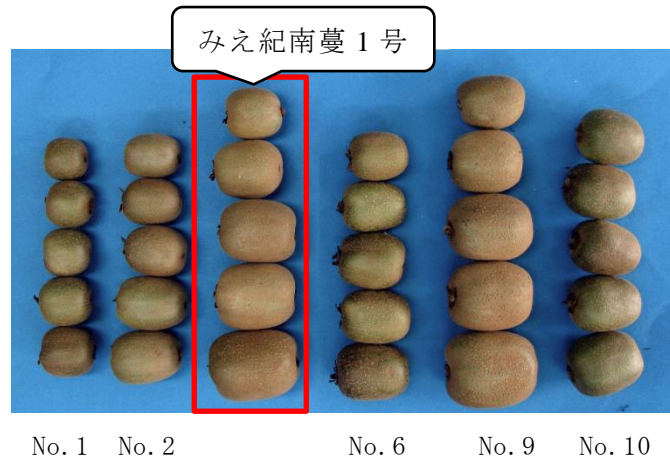


写真1 「みえ紀南蔓1号」果実

写真2 シマサルナシ自生系統の果実

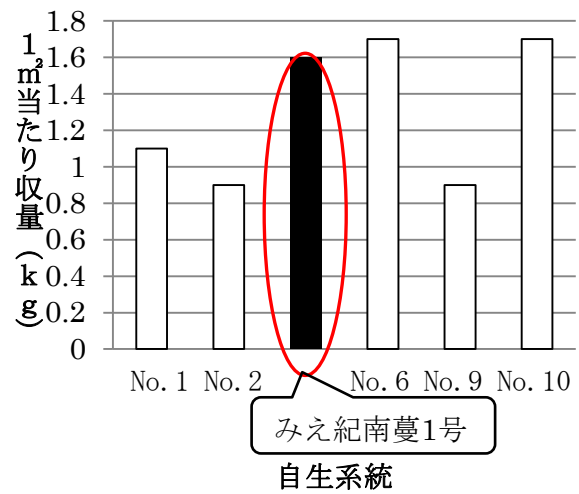
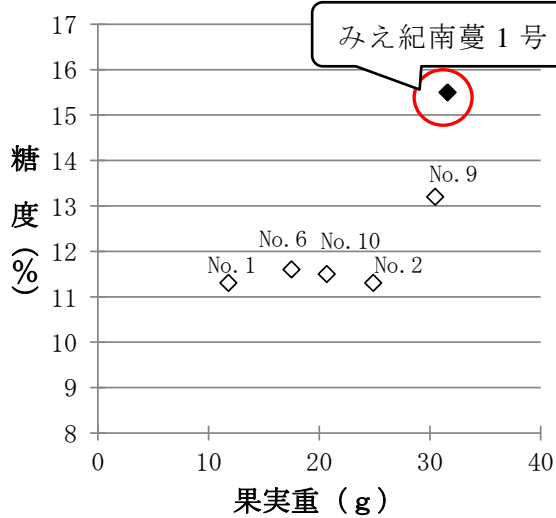


図1 自生系統の果実重と糖度

図2 自生系統の1㎡当たりの収量

表1 「みえ紀南蔓1号」の果実品質

品種名	調査場所	1果実重 (g)	果径 (mm)		偏平率 (%)	糖度 (%)	酸度 (%)
			タテ	ヨコ			
みえ紀南蔓1号	紀宝町	30.4	40.9	33.1	124	18.0	1.50
みえ紀南蔓1号	研究室圃場	32.9	42.9	33.6	128	13.8	1.55
淡路	研究室圃場	11.6	28.9	24.3	119	10.1	1.55
府中	研究室圃場	15.8	33.5	27.1	124	7.7	0.90

1) 調査日は、2015年12月10日、紀宝町分は2015年12月3日
 2) 収穫日は、2015年11月20日、紀宝町分は2015年11月17日

(湊 英也)

[その他]

研究課題名：三重のふるさと特産果樹新品種の開発事業

予算区分：県単

研究期間：2003年度～

研究担当者：湊英也、市ノ木山浩道、須崎徳高

発表論文等：園芸学研究 10 (別2) : 359.2011

園芸学研究 15 (別1) : 88.2016